木村健二郎先生を悼む

藤　永　太一郎*

木村健二郎先生

木村健二郎先生が昭和63年10月12日逝去されました。92才であられました。本海洋化学研究所を創立された石橋雅義先生が逝去されて丁度10年になります。両先生は何れも明治29年のお生まれであり，東京大学と京都大学の理学部において揃って分析化学，地球化学の領域に優れた業績を残され，30年に及ぶいわば「木石」時代とも呼ぶべき華やかな学問の展開と開花に貢献されたと申すことができましょう。木村先生は石橋先生より御長命でありましたが，最近も極めて御健勝であられましたので，この突然の御逝去は誠に痛恨の極みであります。木村先生の御業績につきましては「ぶんせき」昭和63年12月号942〜945頁に藤原鎮男，浜口博，桜井欽一といった直弟子の諸先生が述べておられますので，此処では筆者なりの弔意を表させて頂きたいと存じます。

「京都大学の藤永君。質問をどうぞ」といきなり凛としたお声で御指名下さったのが座長の木村先生の筆者への初めてのお言葉でありました。戦後始めて京大で行われた日本化学会年会「分析化学，地球化学」部会の会場での事であります。確か菅原健先生の岩奨水（処女水）に関する御発表に興味をもって挙手したのであったと記憶していますが，どうして筆者を御存知であったのかいつも新しい感激をもって想い起すことであります。

筆者が京大に入学した頃（昭14），石橋研究室では海洋化学研究が始まって間もない頃で，岸春雄助教授はRd-Thを使ってPbのトレーサー実験を行ない，原田保男講師は海水中のRb，Csを，品川睦明助手（後に阪大名誉教授）は海水中のAuを分離しつつありました。当時既にわが国は鎖国に近く，筆者がKolthoff教授に出した手紙には，辛うじて一通の丁重な返事と別刷多数を頂いたのですがその後5年間音信が絶たれたような時代でありました。このような間わが国には異質の化学の花が開いたのであります。北大（太秦康光教授）は火山を，東北大（小林松助教授）はアマルガム還元法を，東大（木村健二郎教授）は温泉を，名大（菅原健教授）は陸水を，京大（石橋雅義教授）は海水を，阪大（槌田竜太郎教授）は錯塩を，九大（岩崎岩次教授）は火山を主として研究し，戦中戦後20年を通じ分析地球化学部門を形成して素晴らしい成果を挙げていました。日本分析化学会，日本地球化学会が生れると共に，学的興味が大きく変化したということができると思います。地球化学である限り相互に入り混ってはいたものゝ略々東大系は陸を，京大系は海をという風に研究領域を大別していたのです。尤も東大出身でも三宅泰雄，黒田和夫両博士といった方々は海水分析の研究をされ，Csの濃度について原田，黒田両博士

＊（財）海洋化学研究所理事長

1988年3月7日

藤永太一郎様

お手紙及び海洋化学研究 Vol 2 No. 2
有難く拝受致しました　御健勝各方面に
御活躍の御様子を拝承　大慶至極に
存じ上げます

中海に自動連続分析装置を設置
されての極めて興味ある御研究には
橋本博士も御参加の御様子　橋本氏にも
かつて原研で大変お世話になりました。
大変おもしろい成果をおあげになり深く感銘
致しました

中海シンジ湖は昔見物に誘われたことも
あり　その際急潮が跳ねると教えられし
記憶がありますが　最近は如何でありま
しょうか

最近　私の連句の師匠の宮田雪雨博士と
水産大学の化学教授の磯直道博士と私の
三名にて歌仙(36句構成の連句)をつくり
あげましたが　その中に　私の中海かシンジ湖
を思い出してつくった一句が入っております

磯氏の
"朝月に白露ほろとこぼすらん"
に私が
"鱧跳ねる汐入りの湖"
とはり　更に雪雨宗匠が
"裏の帰りヘルン旧居も素通りか"
と付けて下さいました

この歌仙の載った草茎1月号を別送致します
(P.58に掲載)
(老人がモタモタ発送にとりかかりますので　いつお手許に
参るか分かりませんが御笑覧下されば幸甚です
お受取りのお知らせなどはご放念願い上げます。)

日本化学会編の化学の原典(4)分析化学
がようやく出来上り一冊もらいました
Heyrovsky関係の御執筆拝読大変
勉強になりました　藤永豊様は御令息
と拝承致しましたが　御活躍の御様子大慶に
存じ上げます　志方益三氏は私と一高の同級
でした(当時は理科10名　農科20名で一クラスを
つくっていました)　いろいろつまらぬことを申上げ
ご容赦下さい

御健勝を祈りつつ

木村健二郎

木村健二郎先生の御手紙

間の論争など時に話題を賑しました。猿橋勝子博士と筆者のクロリニティー論争も今はなつかしく思い出されるそれらの一つであります。

日本分析化学会(昭27)が誕生すると，IUPAC主催で国際分析化学会(ICAC)をわが国で催すことにしようということになりました。このICACは昭和47年京都で新装の国際会議場で行なわれましたが，その会長は柴田雄次先生，日本分析化学会会長木村健二郎先生，組織委員長石橋雅義先生，実行委員長筆者という顔振れでありました。この会議は大成功でIUPAC事務局長Morf博士はこのような国際会議は空前絶後だと絶讃したものです。1969年コルチナ・ダンペッツォの総会でIUPACの正式主催承認をうけ，1971年ワシントンの総会では会場の一室を借りて前年夜祭を催して会員を招待をするような離れ技もやったものです。実際ICACにはBelcher, Alimarin, Charlot, Martin, Pungor, Meinke, Walsh, West(P.W.), Kaiser, Kirsten，宗宮といった諸先生の招待講演があり，御不快の柴田会長に代って木村健二郎先生が歓迎の辞を述べられ石橋雅義先生が開会の挨拶と経過報告を述べられたのでありました。

さて木村健二郎先生，御令室芳子御夫妻にはその後も各種の学会のある度にお供することができて思い出は尽きません。それらは福岡であったり，高知であったり或いは徳島の阿波おどりであったりしますが，最後の最大の思い出は筆者が日本学士院賞を受賞（昭61）した時のことになります。

当日先生は足を傷めておられた有沢院長を代理して早朝から終始天皇陛下を先導御案内になり，授賞者の紹介，宮中での御培食など大変な御苦労をなさったあと着換えまでされて赤坂での文部大臣招宴まで御一緒下さいました。この年以降昭和天皇の御出席はなく，有沢院長も木村先生も3年を経ずして御他界になられた事になります。

木村先生はかねて形型子（俳名）葉山（連句）の号にて会名の高い歌人であられましたが昨春，本「海洋化学研究」を御高覧下さいまして関連して珍しく色々のことを記述された長文のお手紙を下さいました。御家族の皆様も同人句誌「草基」も共に転載をおゆるし下さいましたので，まことに光栄に存じ本誌に飾らせて頂きました。重ねて厚くお礼を申し上げ改めて先生の御冥福を祈り申し上げる次第でございます。　　合掌。

文中「宍道湖のスズキ」の句の事が出てきますが，次のような連句の若き詩情に感動致します。

ラブレター手渡す役を頼まれて　　葉　山
吹雪烈しき女子寮の門　　零　雨

三吟歌仙　わが胸にの巻　（草茎歌仙　第二三三〇番）

わが胸に崩れはてけり雲の峰　零雨
なほ眼ナ裏に残る雪渓　直道
林道をつくる発破の響き来て　葉山
揺るるともなく揺るる秋草　雨山
朝月に白露ほろとこぼすらん　道山
鱸跳ねたる汐入りの湖　雨山
喪の帰りヘルン旧居も素通りに　道山
ピアノの曲がいづくともなく　雨山
ラブレター手渡す役を頼まれて　道山
吹雪烈しき女子寮の門　雨山
金銀の飾りまとひし聖樹ゆれ　道山
太平洋を見はるかす窓　雨山
満月はいま中天に動かざる　道山
実験了へて新酒酌みあひ　雨山
前所長写真が壁にさやけしや　道山
まこと十年一昔なり　雨山
花万朶母校の塀の低きこと　道山
水素ガス詰め飛ばす風船　雨山

境内を出れば末黒野ひろがりて　雨山
はるか彼方に故里の山　道山
子も孫もロスへ移住し老夫妻　雨山
百組すます仲人の役　道山
贈られしカーネーションを大壺に　雨山
裏の噴井の音の静けさ　道山
碁を打つを日ぐらしとする権宮司　雨山
なほりのおそき首の腫れもの　道山
悪いことみな母方の遺伝にし　雨山
会津生まれは朝酒が好き　道山
木犀の匂ひかすかな雨の月　雨山
空の虫篭吊したるまま　道山
うそ寒く片目の達磨睨らみつつ　雨山
新総裁に多き難問　道山
願はくば富士噴火することなかれ　雨山
立春以来夢におびえて　道山
旅の身に異国の花は散りやすく　雨山
陽炎燃ゆる日本人墓地　山